
オレとアイツの人形劇 【リメイク版】

しゃおろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとアイツの人形劇 【リメイク版】

【Nコード】

N5753Z

【作者名】

しゃおろん

【あらすじ】

ある日突然クラスメイトの伊藤君と勇者として異世界に召喚され、勇者として頑張るお話 と見せかけて、勇者としての扱いを受けるのはクラスメイトの伊藤君のみ。

そして召喚されて1日も経たないうちに空気のような存在になる主人公。

居るかどうが怪しい魔王の討伐に伊藤君たちと向かうが、伊藤君たちにはいいように扱われ、ギルドの依頼で稼いだお金を伊藤君たちに持っていかれとやってらんないんだぜ。

というよりもいきなり召喚して魔王を倒せだなんて無茶言うなよ…。

注意

長い長い更新停止から目覚めましたしやおろんです！

様々な苦難を乗り越え久々に描いていこうと思ひ復活したわけですが、なんだこの稚拙なものは！？

となったので少しですが文章力も上がったと思うので心機一転リメイク版としてこの作品を更新していきたいと思います。

リメイクといっても対して書いてなかったわけですが…

ゆっくり更新していきたいと思いますのでぜひともよろしくお願いいたします。

第一幕 ムプロローグ（前書き）

始めましての方は始めまして、お久しぶりの方お久しぶりです。
しゃおろんです、何とか復活しましたよー

復活の呪文を唱えること数十回何とか生き返ったのですよ

また作品共々よろしくお願いします。

では、オレとアイツの人形劇 【リメイク版】開幕でございますー

第一幕 ムプロローグ

真白なクロスに黒い床が広がる一室。

そこには壁沿いに本棚が並べてあり、様々な種類の本が所狭しと詰め込んである。

お世辞にも衛生環境がよいといえないような部屋の中心に黒いテーブルと椅子二つを置き、そこに腰掛けている若い男の姿があった。彼はそんな部屋であるにもかかわらず優雅に紅茶を飲み、幸せそうに一冊の本を撫でている。

その手つきはまるで自分の愛するものに対してのもの。

所謂、愛情というものが多分に含まれているように感じる。

そして彼は誰に向けるわけでもなく一言つぶやいた。

これが始まりの本だと。

そつとつぶやいたその言葉には過去を振り返る老人のような哀愁が漂っており、とても彼のような若い男が出すような雰囲気ではなかった。

彼は黒いスラックスに白いワイシャツを着ており、上に茶色のセーターを着ている。

胸元に首から茶色の紐でぶら下げた銀の懐中時計が目立つ。

ふと何か思い立ったようにその懐中時計で時間を確認した彼は懐中時計を指で突きながら深いため息をつく。

さながら恋人を待つ女性のようなその仕草は思いのほか彼に似合ったものだった。

「やつはまた遅刻か、これでは開演に間に合わないではないか。」

その言葉は相手に届くことは無かったが、幾度と無く口にした言葉なのかえらく馴染んでいた。

再び手を先の本に戻し撫で回しながら目を閉じ、物思いに耽るように静かになるが、ひとつの音がその雰囲気をかき消した。

「あら、お休みの途中かしら？」

声の主は女性であり、まだ大人になる前の少女のような顔立ちだ。服装は赤チェックのスカートに黒のシンプルなブラウス、それに加え赤のネクタイ。

髪の毛は肩のほどまで伸びており、まっすぐとしたストレートであり艶やかな黒色をしている。

彼女はよほど髪の毛の手入れに気を使っているであろうということが容易に気づくほど綺麗な髪の毛だ。

「馬鹿いつてんじゃないよ、いつも遅刻ばかりの君のために送る言葉を考えていたのだよ。」

「そうなの、それはどんな言葉なのかしら。」

すかさず彼はこう答える。

「遅刻すると胸ってちっこくなるんだぜ。」

「へえ、それは大変。今度から気をつけるようにしますわ。ご忠告ありがとうございます。」

満面の笑顔を浮かべている彼女の胸はまるで絶壁のようだった。

オレとアイツの人形劇 第一幕へプロローグ

目覚めるとそこは石でできた部屋の中だった。

隣にはクラスメイトの伊藤君が全裸で横たわっており、自分も着ていた筈の制服がすべてパージされていた。

状況を説明するとご存知のとおり自分もまたまた全裸なのであった。そして、この激しく誤解されそうな嫌なシチュエーションから全力で逃げ出したい気分だ。

どうやらまるで生贄を捧げますと言わんばかりの祭壇の上に俺と伊藤君が寝ころがされていたようだ。

周りを見渡すと不気味な雰囲気that浮き彫りになってきた。

正方形の部屋の真ん中に生贄の祭壇っぽいもの、四方に設置された蠟燭。

祭壇の下にはどこかで見かけてそうな魔方陣らしきもの。

また、その祭壇が真っ赤な、まるで血によって描かれたようなものということ。

ここまでで本当に勘弁してほしいのだけれども、最大のヤバさを誇る全裸の伊藤君。

ないわ、これないわ。

何で伊藤君が祭壇の上で7割の場所を使って寝転がってんのに俺3割やねん。

微妙に狭いねん。

誰や世界は海と陸や七三分け、働きアリの法則とかのように3・7か2・8が丁度ええんやって言ってた奴出て来い。

そんな奴一回俺のこの右腕をもってして処刑したるわ。

心の中で無駄に関西弁で愚痴りながら伊藤君のアホな寝顔を見ていると目の前の扉がゆっくりと開いた。

入ってきたのは高校生くらいの女の子とガチムチな筋肉と全時代的な軽い防具を装備したお兄さん二人だった。

そのうち女の子が桜色をした綺麗な唇を開き言葉を発する。

「どうやらお目覚めのようですね、勇者様」

とんでもない一言が飛んできましたとさ、オジサンびっくりです。

勇者発言した女の子は腰あたりに赤いリボンが付いている白いフリフリのドレスを着ており、綺麗な黒髪をしていた。

なんとという美人でしようと感動してしまいそうなくらいに容姿が整っている子だ。

少し見惚れているといつの間にか起きた伊藤が真先にその子に近寄り、真白で今にもとけてしまいそうな雪の色をした手を握っていた。

「はい、俺が勇者です。」

「ありがとうございます。これでこの国も…」

手を握られた瞬間両脇に立っていたガチムチお兄さんたちが動こうとするも、それを目で制した女の子が伊藤君に感謝の言葉を言っている。

そのときチラリと誰だこいつといった目を向けられたことを俺は絶対に忘れない。

そう、絶対だ。

「召喚されたすぐ後ですからお疲れでしょう。まずはお部屋に案内いたします。それからその…こちらをお召しください。」

そういつて一着の服を女の子がガチムチお兄さん1から受け取り、頬を染めながら伊藤君に渡す。

あれ？俺の分は？と口に出す前にガチムチお兄さん2が頬を染めながら俺に一着の服を渡してくれる。

頬を染めているお兄さんに危険を感じたので急いで服を着る。

全体的にだぼついた灰色の服で、ボロツちい感じだが着れないことも無く、裸よりも断然いいのだが俺にはどうしても納得いかないことがひとつあるのだ。

俺の服装がまるでしょぼい農民が来てそうな服にもかかわらず、伊藤君の着ているものは俺の着ているものとは打って変わって白のズボンに黒のシャツそして白いベスト。

なんというか金色の刺繍が入っており、成金臭さのするものだった。別にそれが着たいとかそういった感情でものを言うわけじゃないんだが、この差は何なんでしょうかと問いたい。

そして、俺たちが服を着終わると女の子は兵士を連れて伊藤君とどこかへ行こうとするので、遅れまいと慌てて早足で追いかける。

まるで中世ヨーロッパのお城のような内装の大きな廊下を後を追って歩く。

ゆつくりと城の中を歩いていると幾人もの貴族のような服装の人たちとすれ違う。

段々と嫌な予感に苛まれつつも好奇心を抑えきれずチラチラそこら

じゅうを見回しながら歩く。

「こちらです。」

ガチムチお兄さん2の声でふと気づくとどうやら目的の部屋に付いたようだった。

周りに興味を惹かれすぎていたためまったく気づかなかった。

そして俺があちこちを見てる間に女の子と伊藤君が仲良くなっている。少しうらやましいがこの際仕方ない。

今後仲良くなっていけばいいやと諦める。

俺だって男の子、可愛い娘と仲良くなりたいのだ。

お兄さんに促され部屋に入ると、そこは豪華すぎて立ち眩みしそうなほどのものだった。

天蓋つきで綺麗な色のベッドに、赤色を主に使っているところを金の刺繍で豪華さをあらわしているカーテン。

色鮮やかで凡人の理解が追いつかない値段の予感がする坪。

この部屋にいただけで目がチカチカして来そうだった。

またもや俺が周りを見てみると勝手にストーリーが進んでいるようだった。

何故か二つしかない椅子に腰掛けている女の子と伊藤君が話し込んでいる。

どうやら女の子の自己紹介していたようで、女の子は巫女で名前はリリエナというらしい。

ここからが本題なのだが俺たちはこの世界に召喚されたようなのだ。しかもこの世界には魔法が存在し、さらには魔物や魔人、魔王までもが存在しているというのである。

一概に信用することはできないのだが、リリエナが魔法を使って水

を作り出したので信憑性が高いと思う。

そして魔王が現れたので、ぜひ俺たちに倒してほしいとのことである。

ふざけるなど言いたいのが、魔法が使えるというのはうれしい。

男は30歳まで童貞でいることにより、童帝になり神より魔法の力を授かるとある文献に載っていたのだが、30歳まで童貞でいるのは勘弁してほしいところだ。

だから魔法が使えるのはうれしい。

しかし、そのために命を張らなくてはいけない。

魔法を使うというのはそれほど難しいことなのだろうし、世の中では等価交換が当たり前なのだからそのために命をベットする必要があるのだ。

まあ、今更返してくれといわれても無理らしい。

帰還するには魔王の心臓が必要で、そのためには魔王をぬつ殺して奪ってくるしかないのだという。

詰んだ。

直感的にそう悟った瞬間だった。

なんにせよとりあえずは魔法の適性を調べてくれるというので、素直に調べて貰うとする。

なんだかんだ言ってもワクワクを止めることはできないのです。

ところ変わって王座の間。

学校の体育館ほどはありそうな勢いの大きさをしてる王座の間に伊藤君たちの後についていく。

王様の堅苦しい言葉を頂戴してまるで校長のようだなと考えつつ伊藤君の検査を見守る。

伊藤君は水晶のようなものに手も当て目を閉じている。

やがて水晶が神々しい光を放ち始めあたりがぬるりとした感覚に包まれた。

これが魔力なのかつ！？とごっこ遊びをしてるうちに結果が出たらしい。

伊藤君の魔力値は21万らしく、適正属性は火、水、土、風、光。

これは異例のことのようで周りがざわついている。

リリエナの説明によると普通は2、3個の適正属性で天才レベルだということだ。

一般だと1個の適正が当たり前なんだそうで、ここまで来ると神の領域だと伊藤君は褒めちぎられていた。

さらに魔力値は普通が500～1000で、優秀なものが4000～5000ほどらしい。

魔力で魔術師の戦闘能力が決まってしまうかねないこの世界で、伊藤君の魔力値は破格のものだろう。

これはまさに勇者にふさわしいというものだ。

俺が言えた義理ではないが伊藤君は元の世界で良くも悪くも普通で、容姿は日本人そのもの。

身長が少し高いくらいで、運動神経も学業のほうもおおよそ中間地点だった。

そんな伊藤君はここでの世界のほうが住み心地がいいんだらうなと考えていると俺の番が回ってきた。

前に出て水晶の前に立つと周りからの嘲笑が聞こえてきそうな雰囲気だった。

周りに立っている貴族のような人たちが主な原因なのだろうが、ど

の人も俺の服装を見てあざ笑っているようだ。

そんなことに負ける俺ではないので水晶に手を当て、目を瞑ると手のひらからぬるりと魔力のようなものが抜ける気がした。

少しすると水晶が伊藤君のときと同じように光る　　と、思いきや部屋全体が伊藤君のときよりもぬるぬるしている上、薄暗く光る。

この光り方は人それぞれなのでいろいろ在るみたいだが、周りの反応を見る限り普通のことではないようだ。

薄暗い光りで結果が文字になって現れる。

その文字は見たことも無いはずなのに不思議と読めた。

どうやら俺の結果は魔力値が7万で適正のほうは水と闇のようで、まだ優秀なレベルに落ち着いているようだ。

魔力値は伊藤君よりも低いもののほかの人と比べると異常なまでに高い数値だ。

嬉しいが、伊藤君よりも低いので若干微妙な気分だった。

俺の結果も上々のようだったが如何せん伊藤君のほうが高く、服装もしつかりとしているので周りの人はあちらに目がいつているようである。

俺の結果を王様が確認した後、またお言葉をいただいて退室を促されたのでそそくさと王座の間を出ることにした。

出てすぐに伊藤君はリリエナとどこかに行き、俺はガチムチお兄さん2に部屋へと案内して貰うことになってしまった。

先ほどりリエナから説明を受けた部屋のようなものを想像していたが、案内された部屋は質素なもので机と花瓶の置いてある棚、普通のベッドが置いてある部屋だった。

部屋の中に入るとお兄さんが付いてこないか心配だったが、特にそのようなことは無く何か困ったことがあつたらいつてくれ。

と目をそらしながら頬を染めて言われたくらいで特に何も無かった。
少し疲れていたのでベッドに身を投げ出して大の字で寝転びながら
頭を整理する。

変なことに巻き込まれたなと思いつつも考えても栓の無いことな
のでやめる。

明日から日記でもつけるかなと考えているとよほど疲れていたのか
すぐに意識を手放した。

第一幕 ムプロローグ（後書き）

少し少ないかな？と思いつつも切がいいのでここで投稿。

第一幕 ムブローグ2（前書き）

でろりーぬが最近言うことを聞いてくれないのれす。

買った当初は従順な子だったのに……

公園でわんこと戯れてたら幼女たちが寄ってくるので一緒に遊んだりします。

冬なのに子供たちはいつでも元気だねえ……その若さを分けてくださいな

あ、活動報告いろいろ書いていこうと思うのでたまに見てやってくださいな。

第一幕 ムプロローグ2

強い日の光を受け、誰に起こされるわけでもなく自然と目が覚めた。どうやら昨日もらったボロい服のまま寝てしまっていたようだ。

よほど疲れていたのだろう、昨日のお昼寝過ぎに寝たはずなのに今はもう日が登りきっていた。

しかし、起きたのはいいが今後の予定をまったく知らされていない上、それをどこの誰に聞けばいいのかさえもわからないという状況だ。

仕方がないので誰か来るまで部屋を散策することにした。

昨日の時点では気が付かなかったが、この質素な部屋からはあまり想像できない綺麗な色と形をしたバラに似た造花が花瓶にさしてある。

少し気になったので手に取ると質感からやはりこのバラは造花であることがわかった。

持ち上げるとカラントとものが落ちるおとがしたので花瓶の中身を見てみると、シルバーの指輪が入っていた。

シンプルな指輪なのだが内側に小さく文字が刻印されている。

その数は大量で小さすぎて読むことはできないが、かなり精密な形で書かれている。

誰かが忘れていったものかもしれないので後で誰かに報告しようと回収しておく。

指輪を棚の上においた瞬間右にあるドアがゆっくりと開いた。

空いたドアから昨日部屋まで案内してくれたお兄さん2が、食事をトレイにのせ部屋にはいつてくる。

放置されていたためガチムチなお兄さんでも来てくれただけで今はとても嬉しかった。

指輪のこととか今後のこととか色々聞きたいことがあったため非常に助かる。」

「おはよう、食事を運んできたから暖かいうちには是非食べてくれ」

顔の厳つさに似合わず滑らかで低音のいい声が部屋に響く。
雰囲気はさながら爽やかな男子だ。

「ありがとうございます。昨日からなにも食べてなくてお腹がペコペコで…助かります…」

お兄さん2は笑顔で頷きながら食事をテーブルの上に並べる。
冷めないうちに食べようと椅子に腰かけると向かいの席にお兄さん2も座る。

「失礼するよ。いいかな？」

と少し恥ずかしそうに頬をかきながらお兄さん2は座った。
印象は少し厳つい感じではあったが、対面して表情を感じ取ると寧ろその中に柔らかさのある不思議な人物だった。

「あー、どうぞ。一人で食べるのも寂しいものなので」

「ありがとう、君も聞きたいことかあると思うし食べながら話しましょう。」

あ、オレの名前はエリック。

君の世話を頼まれたんだ、これからよろしくね」

「是非ともよろしく願います。
安部春臣といます。」

あーっと、こちらだと春臣の部分が名前になります」

「こちらこそ、世話なんて言っただけで俺も本業は見ての通り兵士だからあまり期待しないでね？」

爽やかに笑いながらエリックさんはそう言った。

「あ、そうだ。先ほどその花瓶のなかに指輪が落ちてたのですが……」

そういいながら席を立ち、先に拾った指輪をもってくる。
指輪をテーブルの上に置くとエリックさんは不思議そうな顔で首をかしげ、それを手に取った。

じつくりと見ているようだがそんなに珍しいものなのか。

「そんなところに指輪が？この部屋は作られてからあまり使われてないからそんなことはないと思うんだけど……」

それにこれは内側に魔術の刻印が施してあるね。

専門じゃないけどそこそこ値の張るものだと思うけど。

ありがとう、とりあえず報告しておくよ」

エリックさんは不思議に指輪を胸のポケットにしまっ、春臣に顔を向ける。

「是非お願いします。あと、その……恥ずかしいんですけど、魔術刻印って言うのは……？」

「全然恥ずかしいことじゃないよ。

まあ、あれだけの適正があって知らないのはびっくらだけどね。

魔術刻印って言うのは主に魔術を発動するときに使うんだけど、こ

の指輪にはそれに使う文字がすべて刻まれているんだ。
で、全部刻まれているとどうなるかというと、簡単に言えば魔術の
発動をより強力かつ速く発動することができるんだ。」

どうやらなかなかすごい物のようである。

しかしそんなものがあんなところに放置されていたのか謎である。

「さらにこれは見たところによると発動体としても使えるみたいだね。
あ、発動体って言うのは魔術を発動をサポートしてくれるものだよね。」

「な、なるほど…要するになかなかいいものだということですね」

少し長くなりそうなので一回切る。

「まあ、端的に言えばそういうことになるかな。
この指輪は一応報告しておくよ、ありがとね。」

エリックさんも長くなったのを察したのか話題を手早くきつてくれた。

「エリックさんは魔術に詳しいみたいだけど、もしかして使えますか？」

「まあ、使えないことは無いけれど才能が無くてね…努力はしたんだけどどうも剣のほうに才能があつてさ…」

少し空気が悪くなったので、申し訳ない気がしたけれどなんと言っていないか分からずとりあえず食事に手をつけた。
トレイに乗っていたのはシチューとパン、それに水だった。

シチューをスプーンですくい口に運ぶが冷めており、薄味で雰囲気も相まって美味しいものではなかった。

「ま、まあ、今は満足してるんだけどね」

エリックが気まずそうに変な方向を向き頭をかきながらこの雰囲気を開けてくれる。

中々いい人だなと思いつつ、いろいろ聞く。

エリックさんはどうやら姫の近衛隊の所属らしく、どうやらエリートらしかった。

最初は魔術の勉強をしながら学者を目指していたようだが、どうも適性が無く父親が軍人ということもあり、剣術を学んだらしい。剣術のほうは才能があつたらしく鍛え始めるとすぐに力をつけて近衛の試験をパスしたらしい。

「あの、エリックさんにこんなこと頼むのもあれなんですけど…魔術、教えてくれませんか？」

エリックさんに聞いてみると、笑顔になり僕でよければと了承してくれた。

上手いこと魔術の勉強を手配できたので、うれしさのあまり何度も頭を下げた。

「あ、あと敬語はやめにしようよ。」

これから一緒にいることも多くなるだろうし、堅苦しいのは好きじゃないしね。

僕は春臣と呼ばせてもらおうよ？」

また恥ずかしそうに頬をかきながら言うエリックさん。

いや、エリックは窺うような目で見ているが、今までの仕草や言動

から好感がもてる人物だということは十分理解できるものだった。

「是非っ！よろしく、エリック。」

その言葉を聞いたエリックはまたまた頬をかく。

「こちらこそよろしく。」

はははっ、なんだか嬉しいよ、僕実は友達少ないからね……」

どうやらその仕草は恥ずかしさを紛らす癖なのだろう。

外見だけを見ると、とても似合いそうには無いがその姿は妙に様になっていた。

ご飯を食べ終え、エリックの古着だという服を新しく獲得し着替え、とある部屋の前に着いた。

古着にしてはまだ新しいもののような服はなかなか仕立てのよいもので、目立つことなくしかしこの前のように笑いを誘うような服でもなかった。

エリックが扉を開け、俺に入るよう促すとすぐに扉を閉めてまるで逃げるかのように去った。

中を見渡すと伊藤君とリリエナ、それに知らない女性が三人いた。三人とも美人でチープな言い方になってしまいがアイドルグループのように見えた。

一人は燃えるように赤く激しく短い髪に活発そうな表情に目は少し細く、鋭い眼力を放っているが全体的に愛嬌のあるまだ少女のような女の子。

全体的にしなやかそうで華奢な体をしているが、持っている武器が見た目のままではないぞと主張している。

二人目に緑色でロングストレートの髪の毛をしており、少したれ目な女性。

おっとりとした雰囲気が離れていても分かるほどだった。

さらに、ローブを着ているのだが一部の部分がすばらしい具合に盛り上がっており、男として非常に惹かれるものがある。

最後に金髪の女の子で、この子はまだ未成熟な体をしており、とても女性と呼べるような子ではないのだがこの中でも人一倍勝気な顔をしている。

目は少し釣り目気味で小生意気な悪魔という表現が正しく思えるような容姿だった。

見る人が違えば天使にも見えるような容姿ではあったが、少なくとも小悪魔のように感じたのである。

長い机の奥に伊藤君と巫女さんが並んで座っていて、伊藤君の左側に金髪の子。

右側の巫女さんのほうに緑色の髪の女性が座っており、その隣に赤髪の子が座っていた。

入室した際、全員から一度視線を向けられたがまったくといっていほどほかの反応が無く、再び5人は会話に戻ってしまった。

会議というのもおこがましいほどにお粗末なものだったが、その内容が進むにつれ俺の存在は空気のように溶けていくようだった。

結局自己紹介もされぬまま椅子に座することもなく部屋の隅で立って聞いていた。

内容は30日間で伊藤君を鍛えて、その後ここにいるメンバーで魔王を探し出し討伐の旅に出ることに決まった。

しかしびっくりするのは魔王が現れたという啓示があり、その魔王の姿が確認されていないのにも関わらず、王家秘蔵の召喚魔術システムが刻まれたあの祭壇で勇者召喚の儀を行ったようだ。

会議が終わった後、伊藤君たちが談笑してるのを尻目に部屋を出ると扉のところにエリックが申し訳なさそうに立っていた。

「さっきはごめんね、どうももう一人の勇者様が苦手でね…」

そういいながら申し訳なさそうにする彼に話を聞くとところによると、勇者の従者として選ばれたものたちの中から一際美人の子達を選んだ上、周りの人間に対してかなり高圧的な態度をとっているようだ。もともとのイメージではそのような感じはなかったのだが、ここに来て本当にまだ全然たっていないのに変わってしまったようだ。

「あー、伊藤君のことかな？なんか一寸俺が知ってる時とは違うなあ…今の伊藤君は…」

伊藤君のことも気になるところだけれど今は自分のことが精一杯。まず身の回りのことを済まそうと思う。

「エリック、予想通り魔王の討伐に向かうことになったんだけど、魔術の件今日からお願いできない？」

エリックには急ですまないとは思いつつも、旅立つときになって準備不足ですでは洒落にもならない事実だからな。

「全然いいよ！あ、そうそう春臣にこれを渡しておくよ」

胸ポケットを探り取り出したものは先ほどの指輪だった。

「どうも、よく分からないものらしくてね。処分してくれといわれたんだけどもったいないし春臣が使っただろうし渡しとくよ。」

そっぴいなから心なしか先ほどよりも綺麗になつた指輪を受け取る。

「ありがとう、助かるよ。そうと決まればまず一般的な常識からぜひともご教授願います、エリック先生」

「こちらこそよろしく。さあ、早速行こうか。まず見てほしいものがあるから先にそこに行こうか」

第一幕 ムプロローグ2 (後書き)

予定より早く完成！。

誤字脱字報告、感想、評価、などなど幅広くお待ちしています！

第一幕 ムプロローグ₃ (前書き)

やっとこさ投稿なのさー

もうすぐ年が明けますねー

皆さんはどんな年だったのかな？

では少し短いですがどうぞ！

第一幕 ムプロローグⅢ

エリックに引つ張られて付いていった先に在ったものは図書館だ。かなり広い部屋に所狭しと本棚が並べられ、そこには数え切れないほどある本が収納されていた。

ジャンルだけでも様々なものがあつたがやはり一番に目に付いたものは魔道書、所謂魔法の本について書かれている本だった。

「春臣に見てほしかったのはこの本だよ。

外に出るならやつぱり自衛位できないとだし、幸い春臣は魔法の適正があるわけだしね。

ここにある本でがんばって勉強しようか！」

「エリックさん、いくらなんでもこれだけの本を勉強するのはちょっと……」

「大丈夫、ここにあるのはそのほとんどが専門書だから。

片手で初心者本なんて数えられる範囲しかないよ。」

そう言いながらエリックが手に取った本にはわかりすぎる魔法の本

初級編と書かれているものだった。

激しく地雷臭が漂うようなタイトルの本ではあつたが、エリックが出すのなら問題ないのだろうとそれを素直に受け取る。

「初級だけだとすぐ終わるだろうから中級の下巻まで借りていこう

か」

エリックは軽々と中級の上下巻を二冊とり手渡す。

一冊が10センチほどの本の重みは今すぐにでも捨てたいほどのものだったが、これが自分の命綱とも言えるものなので気軽に捨てるわけにはいかなかった。

その3冊を借りて部屋に戻り、勉強に取り掛かるとエリックはそくさところかに行ってしまった。

本を読み進めると魔法の発動には幾つかの種類があるということがわかった。

一つは紙や地面などに直接魔方阵を書いて発動するもの（サークルモーション）。

二つ目に杖などの魔力媒体を用いて空中に魔法人を描き発動するもの（スティックモーション）。

三つ目にイメージとして不安定にはなるが、自分自身の心の中に魔方阵を描き発動するもの（セルフモーション）。

四つ目に指輪を媒体に魔力をこめた言葉で魔方阵を言葉として詠唱し発動するもの（トークモーション）。

自分にできるものは二つ目の杖を使うもの意外である。

それぞれの利点をあげていこうと思う。

サークルモーションで最も大きい利点として挙げられるものは事前に用意しておけるという点である。

その代わり紙にこめれることのできる魔力量は限界地が低いので、威力に制限がかかったりキャパシティを超える魔術は発動できないということ。

しかし、発動の速度は最速で非常に汎用性が高いものである。

また、魔法陣が描いてあれば魔力を流すだけで発動できるので、描いた張本人でなくとも発動することができる。

魔方阵の描いた紙を魔術符というのだが、これは一般の市場にもよく出回っているようだ。

スティックモーションの最も大きな利点はそのバランス性があげられる。

威力は中程度で速度も中速ではあるが、臨機応変に対応ができる上に魔方阵を描くためのキャパシティの制限がほぼ無く、これをメインに魔法使いが最も多い。

ただデメリットとして中途半端になりがちということもある。

セルフモーションはその秘匿性にある。

このモーションは道具、詠唱、魔方阵のすべてが自分の中で行われるため魔法の発動した瞬間にしか他の者に見えないのである。

四つの中で一番の曲者はこれであり、最も使用者が少ないのもこれである。

その理由は他の何よりも発動において不安定になりがちなのである。また魔方阵を描けるキャパシティ、威力、発動速度は人それぞれ違っており、才能に左右される部分がある。

しかし、そこさえクリアできてしまえば一番の利便性を発揮するだろう。

最後のトークモーションは発動中自分の行動が制限されないところや威力の高さが大きな利点である。

四つのうちで速度が最低なものの、威力が一番高くキャパシティ制限が無い。

しかし、言葉に魔力を乗せる部分が一番難しく才能に左右されてしまう部分がある。

さらには詠唱中に下手をすれば相手に発動する魔法がばれかねない

という一番の問題を抱えている。

いろいろ考慮したうえで一番学びやすそうなものはサークルモーションであるようなので、まずはここからはじめようと思う。

理想系としてはサークルモーションで牽制しつつ、トークモーションかセルフモーションでけりをつけるというスタイルを目指したい。まあ、ここで自分の弱い頭を使って理屈をこねるよりも行動したほうがよさそうなのでまずは学ぶことから始める。

まず必要なのは魔力の操作なのだ。

これができるればまったくいいほど意味が無く、いくら魔力量が多かろうと宝の持ち腐れなのだ。

本に書いてあるのを見ると魔力はどこにでもありふれている力で、魔力量とはその人が貯蔵しておける最大の量らしい。

空中には大量の魔素と呼ばれるものが浮かんであり、それを体内に取り込むことで魔力を生産し貯蔵するようだ。

魔法の発動をわかりやすく説明すれば、魔力が電気で魔方阵が回路なのである。

魔力を感じるために目を閉じてゆっくりと意識を体内に向ける。

思えば向こうの世界にいたときは毎日が忙しくこうして自分の体としっかり向き合うことは無かったように思う。

ずうつと自分自身の体に意識を向けていると吸い込んだ空気の味や心臓の鼓動や脈打つ血管、血の流れを感じる

そうやっているると自然と自分が周りから浮いているような感覚にとられる。

ぼうつとした感覚に身を委ねて、ひたすら無心でいると自分の中に新しい感覚が生まれた。

心臓の鼓動や血液の流れとはまた違った、冷えた空気のようなもの

が体を駆け巡っているようなものだ。

今度はそいつに意識を向け駆け巡るさまを感じていると段々とそれが暖かくなってきた。

おそらくこれが魔素と呼ばれるものなんだろうなと思い追いかけていると、魔素の通り道に一際暖かい場所があった。

丁度鳩尾と呼ばれる場所の少しずれた奥のほうなのだが、何か結晶のような物があるように思う。

その結晶の周りにはおそらく魔力であろう温かい血液のようなものがそこを這う様に渦巻いていた。

そして、それをすうっと手のひらのほうに引っ張るように意識するとイメージどおりに進んでくれる。

魔力を手のひらに出し、クルクルとまわし遊んでみると思いのままに動いてくれる。

ふと目を閉じていることに気が付き開けて魔力を見てみたい衝動に駆られたので、ゆっくりと目を開けるとうっすらと水色に光る魔力があった。

あまりの感動に集中が解けてしまったのかそれは霧散してしまう。

少し寂しく思いつつももう一度、今度は目を開けながら試してみるとうまくいったようで、また手のひらで魔力で遊んでみる。

猫や犬などの動物の形を作って遊んでみるが、どれも不細工で自分の才能の無さに笑った。

こうやってゆっくりと遊ぶのもいつ振りなのだろうかと考えたが、どうにも答えは見つからず日本にいたときのことを思い出し、寂しくなってしまったことで魔力が空中に消えてしまった。

少し疲れたなと思いい外に目を向けてみると薄暗くなっていた。

ずっと椅子の上に座っていたため体中が痛く、伸びをして体をほぐす。

テーブルのほうに目を向けると食事と手紙が置いてあったのだが、どうやらエリックが来ていた事にも気が付かなかったようだ。手紙には夕食を置いておくと言われており、食事が冷え切っているところを見る限り明け方のようだ。いくらなんでも集中のし過ぎではないだろうかと考えつつ、皿に乗っている冷えた何かの肉を齧った。

あの後食事を終え、ベッドに身を預けて寝た。そして今、エリックに起こされ簡単なレザーでできた防具をもらい装備したところである。

安らかに眠っているところにエリックが布団を引っぺがし起こした上に寝ぼけているところに口を開けられ、さらにはパンを突っ込まれ無理やり朝食を取らされた。

やつのことで目を覚ました瞬間に防具を渡され装備するように言われ、装備してみるといやにぴったりとしたサイズの印象が残る防具という謎に包まれた。

いったい何時の間にサイズを測ったのかわからないが、貰えるものは貰う主義なので貰っておくことにする。

そのほかに少し大きめのナイフを二本貰い、それをレザーのジャケットのわき腹にあるナイフをしまう場所に挿す。

「さあ、準備もできたようだし近くにある森へ狩りに行こうか」

「ちょっと待つんだエリック。

今狩りといったかな？一つだけ聞きたいんだけど何をだい？」

「決まっているじゃあないか！魔物だよ！」

エリックの爽やかな笑顔に初めて明確な恐怖を覚えた瞬間だった。

「いやいや、まだ自衛の手段も整ってないし今回はパスしたいな」

明らかに危険すぎると踏み、断るつもりなのだがエリックは頑なに譲らず、結局のところ行くことになってしまった。

その決め手となったのが今後自分がどういう敵と戦うのか魔法をしつかりと学ぶ前に知っておく必要があるといわれたことだ。

当然のごとく森にも浅いところまでしか入らず、少し探索して帰るということなので付いて譲歩していくことにした。

移動は馬車でいい、中でエリックに昨日の成果を見せている。

「春臣の魔力量ってすごいんだね。

僕だったらこの魔力濃度をこれだけの量外に出したら気絶しちゃうよ。」

「あれ？そうなの？てつきり光っているのが少ないからこんなものか」

「違うよ普通はもっともつと薄めて使うしね。たとえばこれくらいかな」

そついつてエリックは手を差し出して見せてくるが魔力があるようなと思わせる程度で視覚には移らなかった。

「なるほど、普通は魔力は見えないのか」

「そうそう、魔力を見えるほど出せるなんて中々いないよ。しかもそのすごさを自覚せずに出すなんてもつとこないよ。」

エリックは少しすねたような顔をしながらこちらも見てるが、本人は特に気にしているようには見えず茶化すような感じだった。

「まあ、僕は魔力に恵まれなかった代わりに気力にはそこそこ自身あるんだけどね」

そういいながらエリックは再び手のひらを差し出してきたのだが、今度は先ほどとは違いそこにはうつすらとした赤い光りがあつた。

「これが気力？そんなものがあるんだ……」

魔力だけでなく気力まであるなんて、まるでゲームのようだなと思っ
ているとエリックが説明してくれる。

魔力は自然にありふれているエネルギーだが気力は生命エネルギー
なんだそうだ。

生命エネルギーといっても命を使うわけではなく、生物が生きてい
るうえで発生するエネルギーなようだ。

生物なら大なり小なり持つており、気力は魔力と違いトレーニング
次第ではその蓄積量を伸ばすこともできるそうだ。

「魔法使いは魔力を、戦士は気力を主に使って戦闘するんだよ。
まれにその両方を使う人もいるけど、そんな人は中々いないね。
で、僕は気力を使う戦士ということなのさ」

気力も魔力と扱いは似ているようでそれを視覚化できるほど放出し
たエリックは戦士としてはかなり優秀ということのようだ。

そんな新しい発見をしているとどうやら目的地に着いたようで馬車から降りる。

エリックは御者に待つように命令してから、装備を整え森には行つた後の注意事項を教えてくれた。

とはいってもそれはそんなに多くなく基本的にエリックから離れず、知らないものには触れないようにといわれたくらいだ。

初めての冒険に心躍らせつつもエリックの後に続きゆっくりと森の中へと入っていった。

第一幕 ムブローグ3 (後書き)

誤字脱字報告、感想、評価、などなど幅広くお待ちしてますー
特に感想はほしいかなあ…誰かくれなひかなあ…「電柱」
チラッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5753z/>

オレとアイツの人形劇 【リメイク版】

2011年12月31日16時57分発行